

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12403

研究課題名(和文) 桃源瑞仙『百衲襖』のテキストデータ化による日本語史研究

研究課題名(英文) A Study of Japanese Historical Linguistics by Text Data of Togen Zuisen's "Hyakuno'o"

研究代表者

山中 延之 (YAMANAKA, Nobuyuki)

京都女子大学・文学部・講師

研究者番号：00782591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、室町時代語資料としての抄物を研究したものである。特に、室町時代の『周易』(易経)注釈書である、桃源瑞仙『百衲襖』を取り上げ、その翻刻を、一部未翻刻ながら、全巻にわたって終えた。翻刻データは、研究代表者の所属する研究会内で共有し、修正をおこなってから、公開する予定である。

また、本資料の翻刻途中に得られた問題点について、2018-2021年度に論文等として発表した。本資料を正確に翻刻するためには他の抄物全般の知識も必要であることから、社寺・大学の所蔵する抄物を調査した。2021年度に仁和寺・京都大学において集中的に調査をおこなうことができた(この点については今後研究を公刊予定である)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

抄物のテキストデータはまだ少ないため、本データを活用することで室町時代の言語史・文化史はもとより、関連する諸分野の研究が促進される。たとえば、室町時代語についてのさらなる研究が可能になるほか、漢文原文への訓点が稠密に施されていることから古代の訓点資料の代替としての活用が期待される。

研究成果の概要(英文)：The aid of this study is to research Shomono(a kind of commentary). I made almost all text data of Togen Zuisen's "Hyakuno'o(A Commentary of Yi Ching(易経) in Muromachi period)". The data is planed to be shared within the study group to which I belong, corrected, and then released.

In addition, some papers were published in 2018-2022 regarding the topics obtained during making text data.

Since knowledge of other commentaries is required to correctly make text data, I researched at Ninna-ji Temple and Kyoto University. In particular, I obtained various information on the enjoyment and distribution of abstracts (this point will be published in the future).

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 室町時代語 抄物 桃源瑞仙 百衲襖 五山文学

## 1. 研究開始当初の背景

桃源瑞仙(1430~89)の著した抄物(しょうもの)資料群は、室町時代の言語・学術等の諸文化を知る上で極めて貴重な資料であるが、今なお研究すべき点を多く残している。桃源は、抄物という資料群が成立したところに多量の抄物を残した。したがって桃源の抄物は、抄物全体の性質解明のために欠くことができない。また、その学術の質の高さや幅の広さも特筆される。その重要性は、足利衍述・芳賀幸四郎・大塚光信・今泉淑夫らによって夙に指摘されながら、いまだ明らかになっていない点も多い。

未解明の点のうち特に重要なものは、桃源の主著のひとつ『百衲襖(ひゃくのうおう)』である。『百衲襖』は、宋・胡方平『易学啓蒙通釈』及び五経の筆頭である『周易』を主な注釈対象とした書である。博引旁証かつ抽象的な内容で、思想史の専門家でなければ難解な記述が多い。近藤浩之氏の科研費(基盤研究(C)23520051)による研究が近年にもあるが、なお研究されるべき点は多い。

そもそも抄物は室町時代の言語等、さまざまな文化史料として重要だが、翻刻という読みやすい形式での本文提供がほとんどなされていない。その理由は多岐にわたると思われるが、ひとつには、抄物が翻刻しにくいことが挙げられるだろう。漢字カタカナ交じり文で書かれ、文字も必ずしも楷書ではないため、判読が難しい。のみならず、漢文にふんだんに施された訓点、朱線によって固有名詞の種類を表す「朱引」(しゅびき)など、抄物には電子テキスト化が困難な情報が多く含まれている。Web上にはいくつか抄物の翻刻が公開されているが、その中には訓点を省略したり漢字平仮名交じり文に改めたりしたものが多い。最も重要な注釈本文を読みやすい形で提供するための処置であるが、原姿から遠ざかってしまっている。可能な限り原資料に近い形で抄物本文を提供しなければ、抄物のもつ情報を活かすきれないだろう。

研究代表者は、応募の時点で既に『百衲襖』巻1の翻刻を試作していたが、その過程で翻刻の困難さを実感していた。

困難さの1点目は、分量が23冊と膨大であることである。京都大学附属図書館清家文庫所蔵の通称「23冊本」を同館のWebサイトで確認すると、写真は合計約1,800枚ある。計画的に翻刻することでこれを克服しようと考えた。

困難さの2点目は、漢文が多量に含まれることであった。漢字カナ交じり文による注釈以外に、『周易』等漢籍の原文とその訓点がおびただしく記載されている。注釈本文以外にこれらも翻刻することとした。なぜなら、訓点は読解の結果の一部であり、注釈の一部を成すからである。

なぜこのように訓点にこだわるかといえば、抄物が訓読資料として有効であることを明らかにするためである。漢籍は必ずしも古い伝本が現存せず、古い時代の訓点不明であることも多い。『周易』の古訓点には平安時代の宇多法皇『周易抄』や鎌倉時代の『群書治要』所載のものがあるが、いずれも抜粋であるために『周易』全体の訓読資料にはならない。ところが『百衲襖』に引用された『周易』には、全巻にわたってきわめて稠密に訓点が施されている。『百衲襖』によって『周易』の訓読法がほぼ全文にわたって明らかになるのである。

このように本文入力を進めてゆけば、読解もまた進行することが期待される。その過程で、『百衲襖』が室町時代語資料として、特に語彙資料としてどれほど有用であるかについても明らかになると期待された。

## 2. 研究の目的

本研究は、次の2点を目的とするものであった。

室町時代語資料として、抄物資料の一つである桃源瑞仙『百衲襖』の本文テキストデータを作成すること

そのデータの活用例を研究論文として示すこと。

室町時代前期の言語資料として抄物は質量ともに最大の資料群であるといつてよいが、研究者の利用しやすい形式(影印・翻刻等)で本文が提供されていないものが多い。桃源瑞仙が著作した一連の抄物は総じて早くから研究者から注目されながらも、今なお利用の困難なものがある。その代表的なものが『百衲襖』である。

そのため、まず研究のためのテキストデータを作成する。次いで、作成したデータベースを活用して日本語史研究をおこなう。テキストデータだけでも語彙研究にはかなり役に立つから、『日本国語大辞典』第2版の補訂等、従来の知見を相当程度更新することが見込まれる。将来的には、桃源瑞仙の学芸を中心とする室町時代文化の研究に発展するだろう。

## 3. 研究の方法

### 【テキストデータ作成について】

『百衲襖』本文が利用しにくいという現状を改善するため、本文のデータ入力を進める。底本には、唯一の完本である京都大学附属図書館清家文庫蔵の通称「23冊本」を用いる。これを正

確に読解するためには、他の『百衲襖』写本や関連抄物を調査する必要がある。当初の予定では、『百衲襖』所蔵機関として京都大学附属図書館・建仁寺両足院・斯道文庫・蓬左文庫等を、他の抄物所蔵機関として上記機関の他に国立国会図書館・国立公文書館・東京大学図書館・足利学校・金沢文庫等を訪問する予定であった。そのために、デジタルカメラ・ノートパソコン・モニタ等、基本的な電子機器を初年度に導入した。さらにその使用法に習熟することで、その後の調査・研究における電子環境を均質に保ち、研究成果にもムラが生じないように努めた。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、調査は大幅に縮小せざるを得なかった。実際に赴いたのは、仁和寺・京都大学のみである。その代わり、その2箇所においては、いずれも複数回にわたって詳細に調査を実施することができた。

テキストデータはプレーンテキストで入力することを原則とした。訓点等は、実際の形式に近づけてルビ等で付すこととした。この方式は、検索に不便であるため、今後別途の方式を考えたい。底本は全23冊、写真にして1800コマあり、翻刻に長期間を要することが予想された。作成した翻刻データは、所蔵機関(京都大学附属図書館)の許可を得た上で、Web等研究者が利用しやすい電子媒体で公開することを計画した。

【テキストデータを活用した言語研究】[初年次]テキストデータ入力と並行して、先行研究をまとめる。これまで『百衲襖』研究が進まなかった最大の理由は、本文が難解であることにある。

『百衲襖』を理解するためには、日本語史の知識だけでは不十分であり、それを取り巻く五山の学芸に関するさまざまな知見を集めなければならない。特に重要なのは(日本語学の知識以外では)中国哲学、その中でも易学の知識である。『百衲襖』を理解するための日本語学・易学研究を整理し、研究の出発点を定める。[第2年次]『日国』『時代別』等の大型国語辞典に見られない用例を中心として、語彙調査を行う。[第3年次]訓点の研究を行う。これまで抄物を資料とした訓点研究はほとんどない。古代の訓点資料で現存するものは仏典に偏り、漢籍の訓点は失われたものが多いが、抄物の訓点を精査することによってかなりの程度復元できるのではないか。この研究のために全巻分の訓点をこの年度に入力する。[第4年次]テキストデータ完成版を利用して、第2年次から継続して精度の高い語彙研究を行う。

研究の成果は、まず訓点語学会や日本語学会等の所属学会で発表をおこなって批判を仰ぎ、その後論文にまとめる。公刊の媒体は、学会誌や応募者の所属する京都女子大学国文学科の機関誌『女子大國文』とすることを考えた。

#### 4. 研究成果

##### 【テキストデータ作成について】

4年間を通じて、テキストデータを全巻にわたって入力することができた。訓点や本文の一部に未入力部分が残るが、このテキストデータによって本資料の本文調査が格段にやすくなったと言える。近年は全体の画像がWebに公開されるようになり、それ以前より研究の便が増してはいたが、やはり写本を読み解くしか研究方法がなかった。しかし、このたびの研究成果によって本文をテキストデータで読めるようになり、さらに本文検索が可能になった。

データ入力を通じて、研究代表者は言語や漢籍享受等について新たな研究のいとぐちを見出すことができた(以下の研究成果を参照)。

##### 【日本語史方面からの研究について】

『百衲襖』及び抄物の読解に基づく研究成果について述べる。

2018年度には、『百衲襖』翻刻に関連する研究として、単著「桃源瑞仙『史記抄』のことわざ「袴下辱」について」を執筆した。桃源瑞仙の抄物として『百衲襖』と双壁を成す『史記抄』に見られることわざ「袴下辱(こかのはじ)」を出発点として、人名を含むことわざの変遷について考察したものである。「袴下辱」は近世になると「韓信のまたくぐり」と表現を変えてひろく文芸作品等で親しまれた。これら人名を含むことわざは、総じて江戸時代から多く見られるようになる。『史記抄』の「袴下辱」は、漢故事が一般に浸透する前の状況を表しているのではないか、という見通しを述べたものである。

2019年度には、本科研に併せて科研費「抄物の文献学的研究」(18H00643)をも受けたことで、『黄氏口義』提要』を分担執筆し、言語篇を担当した。『黄氏口義』は数種の注釈を編集したもので、その中には本科研が研究対象とする桃源瑞仙の講義録も含まれている。『黄氏口義』の言語を明らかにすることは、桃源瑞仙『百衲襖』の理解にも大きく貢献する。また、その黄氏口義研究会における研究成果を次の注釈として公刊した。「建仁寺両足院所蔵『黄氏口義』演雅」翻刻と注釈」(石丸羽菜・松本朋子・黄氏口義研究会(山中も参加)による共著)。本科研研究代表者(山中)は研究会や注釈の執筆に際して意見を述べ、その内容が取り入れられた。

2020年度には次の2点を公刊した。

「抄物に見られる打消接続助詞「いで」 柏舟宗趙講『周易抄』を中心に」を執筆した。『時代別国語大辞典室町時代編』は打消接続助詞について、「いで」が前代までの「で」と並立していると説明するが、抄物での使用実態から、「いで」こそが室町時代に常用されたものであり、「で」は文語であったと結論づけた。本稿において直接『百衲襖』に言及することはなかったが、書写者や成立背景に共通点があり(同じ『周易』(易経)を原典とする抄物であるこ

と、清原家が現存伝本に関わっていること等) これまでの『百衲襖』研究を論文執筆に活かすことができた。また、今後の『百衲襖』研究にも貢献するものであると考えている。

「小特集「訓点資料研究に期待すること」抄物研究から」は、訓点資料は平安・鎌倉時代の言語研究に用いられることが多いが、現存資料の少ない漢籍に関しては抄物の訓点を活用でき、そして活用すべきことを『百衲襖』に即して述べた論考である。調査・挙例に際し、本科研による『百衲襖』テキストデータを活用した。

また 2019 年度は、漢文訓読に関して「園城寺所蔵訓点資料について」と題する共同の研究発表をおこなった。

同じく 2019 年度には、高山寺の学問と歴史に関する資料の翻刻をおこなった。「小川義章師覚書類の概要と翻刻」(大槻信氏と共著)である。本稿は、昭和期に高山寺住職を務めた小川義章の作成した、高山寺史ノートの紹介である。僧侶による学問の歴史を伝えるという点で、抄物に通ずるものである。

#### 【その他】

2021 年度は、他の抄物との比較を通じて『百衲襖』の特質を探るべく、仁和寺・京都大学附属図書館・京都大学文学研究科図書館で実地調査をおこなった。コロナ禍の終息しない中においては遠距離の調査旅行を断念せざるを得なかったが、そのような状況でも質の高い資料を多く有する寺院・図書館で調査を実施することができた。特に仁和寺所蔵の抄物は従来、一部の研究者が断片的に利用するにとどまっていたが、今年度は『山谷詩抄』や『蒙求知抄』などについて詳細に調査することができた。現在それらについて論文を執筆中である。抄物は禅宗寺院を中心に作成されたことが知られているが、それがなぜ禅宗寺院でない仁和寺に所蔵されているのか等、享受に関しても示唆することが多いと思われる。京大附属図書館では『百衲襖』の伝本 3 種を実見することができ、同文学研究科図書館では寿岳文庫を悉皆調査した。

今後はより使いやすいようにデータを整備する予定である。本科研研究代表者が所属する研究会等でデータの試用版を提供し、利用者からのフィードバックを受けて校正等をおこなう予定である。将来的には、資料所蔵館の許可を得た上でより広くデータを公開することも検討したい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山中延之	4. 巻 168
2. 論文標題 抄物に見られる打消接続助詞「いで」 柏舟宗趙講『周易抄』を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 女子大國文	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山中延之	4. 巻 146
2. 論文標題 訓点資料研究に期待すること 抄物研究から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 118-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石丸羽菜・松本朋子・黄氏口義研究会（山中も参加）	4. 巻 88-5
2. 論文標題 建仁寺両足院所蔵『黄氏口義』「演雅」翻刻と注釈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山中延之	4. 巻 223
2. 論文標題 桃源瑞仙『史記抄』のことわざ「袴下辱」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 森田貴之・小山順子・蔦清行編『【アジア遊学223】日本人と中国故事 変奏する知の世界』	6. 最初と最後の頁 196-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤井俊博・磯貝淳一・山中延之・中野直樹・久田行雄・山本佐和子・石井行雄
2. 発表標題 園城寺所蔵訓点資料について 『新版点本書目』補遺として
3. 学会等名 第121回 訓点語学会研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山中延之
2. 発表標題 抄物の基礎知識
3. 学会等名 抄物講習会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高山寺典籍文書綜合調査団（編）、（編集責任）池田証壽、（著）田村恵心・石塚晴通・月本雅幸・松本光隆・山本真吾・池田証壽・徳永良次・矢田 勉・磯貝淳一・白井純・小助川貞次・古田恵美子・土井光祐・金水敏・末木文美士・大槻信・山中延之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 528
3. 書名 高山寺経蔵の形成と伝承	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------